

視覚障がい者とメディア

山崎 ※※※

※※※ Yamazaki

中京大学現代社会学部現代社会学科
学籍番号 C110***

1. はじめに

視覚障がい者になぜ焦点を当てたのか？それは友人の視覚障がい者の姉と出会ったことがきっかけだった。幼いころから一緒に遊び、過ごしてきたため、障害を障害とは感じていなかった。むしろ、音楽やピアノ、とことん自分のやりたいことに挑戦している姿を見ていたからかもしれない。その時に必ず言っていたことは、「ラジオは自分にとって大きな存在」だった。

また、視覚障がい者の方たちの施設に行き、夏祭りやクリスマスパーティーと一緒にするなど、多く交流してきた。それが私の小・中学生までの経験であり、視覚障がい者に対して関心を持ったのだった。

そして大学生になってアルバイトを始めてから、視力が弱い人、色彩が分からない人、盲導犬を連れてお店に来る人、いろいろな人々に出会い、更に私に関心を持たせた。

また、現代のメディアではインターネットが普及し、新聞、ラジオ、テレビが負けた時代と言われている。

特にラジオでは若者のラジオ離れ、消えゆくメディアと言われる一方で、インターネットラジオ「radiko」によってネットを通しての新しいラジオの聴き方が生まれ、期待されている。しかし、視覚障がい者の誰もがネットを使えるわけではない。

また2011年から開始された地デジ化によってラジオを使ってテレビを聞いていた視覚障がい者に生じた問題もある。

そこから健常者（マジョリティー）の娯楽の文化が発展する一方で、視覚障がい者（マイノリティー）であり、情報障害と言われる視覚障がい者にとって、今のメディアの変化は視覚障がい者を社会から離し、情報障害を拡大するのではないだろうか？と疑問に思った。

したがって視覚障がい者にとってラジオはどういう存在なのかを知るとともに、社会から離されてしまう視覚障がい者（マイノリティー）へ目を向ける必要性を訴えたいと思い、このテーマを選んだ。

2. 仮説

メディアは視覚障がい者の情報を得る手段として必要不可欠なものである。

3. 視覚障害とは

視覚は視力、視野、色覚、順応、両眼視、輻輳・解散、調節、眼球運動、眼圧等の機能に分類され、このうち法律で定められた視力と視野の値を下回る場合を視覚障害と呼ぶ。

また視覚障害は、視力が全くない「全盲」と全盲以外の症状で多少視覚が使える「弱視（ロービジョン）」に分けられている。それらに含まれず障害のない人をことを「晴眼者」と呼ばれ、障害となった暖海には出生時による先天的な障害と中途障害にわかれている。

平成23年度版障害者白書によると平成18年の身体障害児・者実態調査では視覚障害者の障害の発生時の年齢階級は出生前又は出生時：13.5%、0～3歳：5.0%、4～17歳：6.3%、18～39歳：14.5%、40～64歳：28.5%、65歳以上：15.3%、不明：12.3%、不詳：4.5%である。

18歳以下の視覚障害者は全国で4900人おり、感染症やその他の疾患、出生時の損傷が主な原因となっている。

また18歳以上の視覚障害者は全国で31万人おり、原因として挙げられているのは、交通事故、労働災害、などの事故や感染症や他の疾患・出生時の損傷・加齢が主な原因となっている。

視覚障害になる原因の病気は、主に糖尿病網膜症（網膜の中の血管が糖尿病によって血圧が高い状態が続くと、血管内が酸欠状態となり新生血管を作ろうとするが、新生血管はもろいため出血しやすく、それが網膜上にかさぶたのようになり、網膜剥離を起こす）、白内障（水晶体の中が白く濁る症状）緑内障（眼圧が高くなり、視神経が障害を受け視力の低下や視野が欠け、最悪失明する恐れがある・加齢とともに増加している）、網膜剥離（網膜が網膜色素上皮からはがれてしまい、視野の下半分が欠けて狭くなったり、著しく視力が低下し、放置すれば失明することもある）である。

4. 視覚障害者の情報取得道具

○一般的な道具

視覚障害者で一般的によく見られる情報取得手段は点字である。点字は1824年フランスの盲人ルイ＝ブライユにより考案されたもので、日本では、1890年に東京盲啞学校教諭「石川倉次」が、ブライユ点字を基盤に日本点字を考案し、日本の点字が生まれた。

一般の文字を点字に直す作業の点約は、点字板といわれる手書き用の筆記具や、点字タイプライター、点字印刷機で亜鉛板に製版してプレス印刷するといった方法がある。

また現在では、点字の文章を点訳するために開発されたパソコンの点訳ソフトがあり、そこで点訳した打点を印刷できる点字プリンタがある。

○一般文字関係

弱視の視覚障害者のために通常の活字の4倍以上の大きさと書き写された拡大写本や、異なる弱視の状態や見え方など多様な状態に配慮し、文字の大きさや書体、レイアウトなどが選択できる「大活字オンデマンド出版」がある。

○パソコン関係

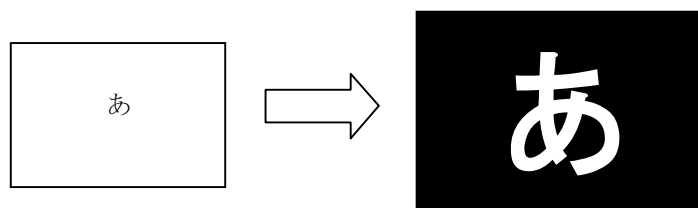
パソコンの画面上に写し出された文字やメニュー内容を読み上げたり、入力した文字を読み上げるなど字体、書体の区別が可能なスクリーンリーダーや、音声だけでなく画面に表示された文字を瞬時に点字に変換できる点字ディスプレイなどがある。このように、弱視者は音声読み上げや、文字を拡大することによって情報を得ている。

○朗読関係

朗読ボランティアや点字サービスを実施している図書館などによって製作された朗読テープの他カセットテープなどのテープレコーダーが使われている。

○その他

音声で文字盤を触ることで時刻が分かる腕時計や、点字ブロック、信号機の音楽等がある。



パソコンの画面や、拡大写本に使われる「ハイコントラスト」のデザイン

背景色が黒、文字の色が白にして、文字を浮き立たせ、見えやすくしている

実際に豊田市中心図書館では古典や現代小説・物語・生活に関する図書・社会福祉関連の本が点訳、拡大写本されたものや、カセットテープやCDに録音された音声図書がある。

5. 視覚障害者の歴史的な立場

時代	扱われ方・職業	補足
古代 (中国)	詩人・音楽奏者・占い師	目が見えないことで感覚が研ぎ澄まされ、一種の超能力を持つ存在と考えられていた

時代	扱われ方・職業	補足
古代	呪術者 ↓ 迷信的な視覚障害者観への変化： 仏教の宿業感（前世で悪いことをしたために 現世で報いを受けること）が登場	前世で悪いことをしたため、この世で目が見えなくなってしまったと考えられた
平安	演奏者（琵琶法師）	仏教行事や貴族たちの遊興の場で活躍
鎌倉 室町	盲僧（琵琶に合わせて経文や仏教賛歌を唱え、各地を回る宗教集団を形作る） 琵琶法師は専門職業化	「当道座」とよばれるようになる
江戸 元禄時代	・当道座の全盛期 ・按摩・鍼・灸師 ・大学者の出現	裁判権を持つ、税の免除など、当道座が一つの身分的組織として認められる 東洋医学が広まり、視覚障害者の新しい職業が広まる 為政者として政治を行なう人の出現
明治	・生活基盤となっていた職業を失う ・分離教育が始まる ・京都盲啞院の設立 ・日本版の点字の開発	・当道座に認められていた官職の廃止 ・鍼・灸・按摩の講習所を認めない ・1883年：西洋医学を中心とした年医師免許規則の公布 ・1872年：「学制」の公布 ・音楽、鍼・灸・按摩の職業訓練 →職業の復活、保障 ・視覚障害者にとって情報入手手段になる

古代の時代からも差別を受けていたが、琵琶法師などの音楽を通じた活動によって視覚障害者は優位な立場に立っていた。しかし、明治以降の近代化に伴い明治政府の政策以降、障害者としての区分分けや差別が強まっていたと考えられる。

6. 視覚障害者の声①

ここでは先天性緑内障・白内障の視覚障害者である著者松井進さんの「見えない目で生きるということ」から、視覚障害者が日ごろの生活の中でどれだけ音を重要視しているのか、またどのようにして情報を得ているのかをみていく。

「第2章見えない体が感じるもの」よりこの章は視覚障害者の生活を一日の生活の流れでみている。また、著者が受けた質問に答える形式もある。以下はその抜粋である。

○昼と夜の判断

視覚障害者の場合も家にいれば外の音や時計、ラジオやテレビの番組で簡単に知ることができ、外にいれば外気や太陽の光、

周りのざわめきなど、判断材料はいくらでもあります。また、私たち人間には体内時計というものが、まあ普通の生活をしていれば夜は眠くなり、昼間は活動しているのが一般的です。

○天気の確認方法

最近テレビの朝の番組では、画面の端に常にその日の天気予報が表示されていますが、視覚障害者はそこに表示されていることすら気が付きません。では、天気を知るための具体的な方法はというと、健常者も視覚障害者もそれ程の違いはないと思いますが、結構参考になるのが音や匂いです。もちろん視覚障害者もラジオやテレビの天気予報を見ますが、感覚的にも天気を感じ取ることができます。特に家の中だけではなく外出すれば、体全体を使って天気を感じとることができるでしょう。

→視覚障害者にとって情報を得る手段は音だけでなく、体全体でも感じている。

○目が見えない人はテレビを見るか？

ここまで何度か登場したテレビについてですが、目が見えない人はテレビを見ることができるのかと疑問に思われる人が多いようです。

答えはもちろん「イエス」です。私は朝起きてすぐにニュース番組をつけますし、帰宅後はテレビドラマやバラエティ、時には子どもと一緒にアニメの番組を観ることもあります。

番組によっては画面の動きがわからないと意味が伝わらないものもありますが、NHKの朝のテレビ小説や大河ドラマ、日本テレビ系列の火曜サスペンス劇場等、まだほんの一部の番組ではありますが、副音声で場面の変化や人物の動きを解説してくれる放送もあります。

また野球や相撲といったスポーツを観るときには、もちろんテレビでもいいのですが、テレビだとあまり動きの解説はされないため、私はラジオを好んで聴いています。ラジオは動きを観ていないことを前提に解説しているため大変わかりやすく状況を説明してくれます。

私はほんのたまに生(なま)の野球を観にでかけるのですが、そんな時は必ずラジオを持参し片耳にイヤホンをさし、ラジオの解説を聞きながら野球を観戦しています。

→視覚障害者が情報を得るのにラジオだけでなく、テレビも使っていることが分かる。

しかしここでテレビとラジオの違う点は、テレビは言葉で表現していることもあるが映像のみで表現している一方で、ラジオは事こまかに言葉で表現されている点である。

○携帯電話の活用

私たち視覚障害者にとって電話はもっとも身近な情報収集ツールですが、携帯電話の普及は、それをより容易にしてくれました。特に視覚障害者にとって初めて行った場所で公衆電話を探すのは本当に大変なことなのですが、携帯電話なら何時でもどこでも電話で連絡を取り合うことができます。

→カメラ付きケータイによる視覚障害者と晴眼者のテレビ電話によって指示してもらい、何がどこにあるのかが分かる。また、音声認識機能によって例えば相手の名前を読み上げると、登録されていれば番号が読み上げられ、相手に電話をつなげてくれるという機能も持っている。この本がかかれたのは2003年であり、時代は9年ほど前である。

今現在ではあまりみられない公衆電話。視覚障害者にとっては探すのでさえ一苦労である。そういう中で、携帯電話の登場は視覚障害者にとって見えなくても見える便利な機能を持った存在である。

○BGM・車内放送の必要性

BGMは時として人の心を和ませますが、嫌いな音楽の種類やジャンルでは苦痛を感じる人がいるかもしれません。例えば図書館でBGMを流すのはリラックス効果があるという意見と集中力を乱すためうるさいという意見もあります。それと同じような意見として電車での車内放送や駅の乗り換え放送がうるさいという意見があります。車内や駅の放送がうるさいという意見には、駅の案内表示や電光掲示板、乗換案内等があれば十分でわざわざ放送で伝える必要がないという理由のようです。特に毎日の通勤客にとっては分かっていることばかり毎日繰り返され、うるさいとしか感じられなくなっているのだと思います。しかしこれは実を言うと私たち視覚障害者にとっては生命線ととても重要な意味を持つ放送なのです。

私たちは駅の案内板や乗り換え案内が見えないため車内放送や駅の乗り換え案内を聞いて判断しています。ですから私たちにとって放送は出かけるときのカーナビ的な存在でこれがないとどのように乗り越えたらいいのか分からず、また、どの駅に停車しているのかがまったく判断できなくなってしまうのです。バスの案内放送も同様で、停車場に合った正しい放送がされないとおりたい所で下車できなくなってしまいます。

→見えないからこそ音の重要性が感じられる。また、それを知らない私たちの無理解が視覚障害者やそれらを使って判断して

いる人に大きな障害を与える結果となってしまうこともある。

○街を歩く

スーパーでよく流されているBGMのイーजीリスニングやレコード店のBGM電気製品のチェーン店で流されている各お店のテーマ曲、魚屋さんの匂いや八百屋さんの呼び込みの声花屋や果物店のにおいはとてもいい目印に使わせていただいています。このように私たち視覚障害者はよく歩く道でこれらの立ち並ぶ飲食店の位置関係を目安にして歩いているのです。

●一見外を歩いている視覚障害者にとっては白杖と点字ブロックや信号機の音がメインに思えるがそれが全ての情報源ではなく、匂い雰囲気など目には見えないものでも情報を取得しているのである。

●視覚障害者の情報獲得の手段の中心は音楽、声など音である。しかし図書館のBGMや歩行者の信号機の音など私たち晴眼者の生活において迷惑がられ、悪いとされているものが、視覚障害者にとって重要な存在でもある。誰もが安心して暮らし、生きていくために誰に対してどんな役割りが果たされているのということを知ることは必要である。

●また、筆者はテレビを見ると言っているが、やはりラジオも使用している。またラジオは映像が無い前提で話しているため視覚障害者だけでなく晴眼者にも事こまかな言葉の情報提供と身近な存在であると感じさせる。見えないことにハンディーはあるものの、ラジオはそれを緩和してくれるメディアなのだろう。

7. 視覚障害者の声②

次に紹介するのは、中学2年生の時に左目に軟式野球ボールが当たり、網膜剥離であると告げられ、中途視覚障害者になった著者鈴木健夫の「白い杖、いきいきと街へ」からコミュニケーションについて、目が見える者と見えないものの会話についてである。

○言葉が生まれる前から存在したと思われる、サインやしぐさ、鳴き声やうなり声、あるいは抑揚を持った声とともに動かしたであろう手足の動きなど、永い間、人間は様々なコミュニケーション手段を駆使して意思疎通を図ったことだろう。

現在我々でも、つい言葉に窮した時など、ボディーランゲージを使うことがあるが、これは言葉を覚える前の幼児にも見られることである。

○会話とか対話については、健常者と変わらないと思いがちである。けれどもよく考えると、「目は口ほどに物言い」と言われているように、「見えている」もの同士の会話と、「見えていない」者が加わった会話とは、全く異なってくるものである。見えないもの同士なら話は簡単なのだが、両者が混ざってくると、かなりやっかいになってくる。

それも見えないことを理解している場合と、そうでない場合とではかなり会話の仕方が違ってくる。

○これは（日本人の会話が表面的、儀礼的であり、相手を真に理解するための会話ではないこと）日本人の間には自と他を区別する概念が乏しく、むしろ自と他が同一概念として理解されていることに起因しているのではないかと思う。言い換えるなら自・他の意識が希薄なため、「他」という意識がほとんど存在しないということだ。つまり、本当に掘り下げた話をすると、互いの間に、深い溝を作ってしまうことになる。

○昔は価値観が画一化していたから自治の区別など必要ではなかった。けれども複雑化した現在では、人によって価値観が多様化しているから、深い会話のやり取りが自他を区別するとともに、そこから互いの理解が始まるのではないだろうか。

→他者を知ることで相手の理解が深まると共に、自分以外の他者の存在を知って区別し始める。

視覚障害者について学び調べていくうちに自分の固定概念が変わった。

まず、第一に視覚障害者はラジオ番組だけを聞いているわけではなく、ラジオを通してテレビ番組を見ているということだ。

第二に、音だけが中心ではなく、他の感覚を駆使して情報を得ているということ。

第三に、私は今まで視覚障害は出生時になることが多いと思っていたのだが、実際には中途障害が多く、その時になった人は今までの生活から一転するため点字の取得や訓練が困難になり、また先天的な視覚障害者と比べ、中途障害者では、あまり点字を学ぶ人も少ない。したがって、視覚障害者だからといって点字が必ずしも使われているわけではないのだ。またスクリーンリーダーがあるが必ずしもそれを全ての視覚障害者が駆使しているわけではなく、ハンディーであり、格差が生じている。

第四に自分という身体全体を駆使して生活している視覚障害者の現状を知ること、無意識の状態が使われ、忘れていた身体感覚があることに気がついたことだ。

視覚障害者は視覚という一つの感覚を失っているがその分、聴覚、触角、嗅覚味覚の4つの感覚を駆使しているということだ。弱視の場合は、視覚が使えるが、全盲であると4つの感覚に限られる。

マクルーハンでは、言語や文字など視覚メディアが生まれたことによって、かつての聴覚中心だった人の感覚を奪ったと記載されていた。まさにそういった現代人が自分自身の身体感覚を忘れ、メディアの視覚の感覚のみだけにとらわれていつの間にか見える者が全てになってしまい本質を忘れてしまうようになっていないだろうか。

第五に私たちが知らないままにしていることによって、障害が理解されないままにしているだけでなく、障害をバリアフリーにするために設けられた環境をなくしかねないということである。例えば松井さんのBGMの話ではそれが顕著に現れている。

8. 地デジに伴う視覚障害者の課題

上波テレビのデジタル放送完全移行（被災地3県を除く）まで1週間。地デジ化されるとテレビの音声はFMラジオで聴けなくなるため、音が頼りの視覚障害者から「テレビから遠ざけられてしまう」と不安の声が出ている。

FM放送とテレビのアナログ放送はともにVHF帯の電波を使うため、多くの視覚障害者が、値段が安く1台で両方聴けるFMラジオでテレビも楽しんできた。だが、地デジはUHF帯なので、ラジオでは受信できなくなる。東京都豊島区に住む全盲の織田洋さん（57）は小型FMラジオを持ち歩き、移動中もイヤホンでテレビ番組を聴くのが日課だ。「画面がいらなからこれで十分。どこでも聴けて便利だったのに」厚生労働省が2006年に実施した身体障害児・者実態調査によると、視覚障害者の情報入手方法（複数回答）はテレビが66%で1位。2位の家族・友人（56%）、3位のラジオ（49%）を上回る。全日本視覚障害者協議会の山城完治総務局長は「テレビはラジオより番組が豊富。ニュースも原稿を読むだけのラジオに比べ、臨場感がある」。携帯電話のワンセグ機能を使えば地デジが聴けるが、「音が途切れがち。電池を消耗するので、いざというとき通話できないと困る」と織田さん。家族が見る自宅の地デジ対応テレビはリモコン操作が複雑で使いづらいという。テレビの機能拡大につながると期待される地デジ化も、視覚障害者にとっては情報弱者化のきっかけになりかねない。「国策で我々を置き去りにしないでほしい」と山城さんは訴える。（2011年7月8日朝日新聞より）

問題点

- 1：リモコンによる画面操作の多機能化の導入
- 2：テレビ番組内での解説放送を扱う番組少なさ
- 3：FMラジオによる受信手段が絶たれること

携帯用ラジオの地上デジタル放送の受信機能の付加、音声ガイドによる操作ができるテレビの開発、解説放送・ニュースなどのテロップ・字幕の読み上げを大幅に増やすことが求められてきた。

そして現在ラジオで地デジを受信可能な機器が発売されている他、メニュー設定や番組表等を音声で読み上げてくれる音声案内テレビが登場している。

9：映画に描かれる視覚障がい者とメディア（ラジオ）

視覚障がい者とメディア（ラジオ）がどのような関係性を持ち描かれているかということを探るために視覚障がい者を取り上げた映画を見た。以下上段（1）は作品紹介、下段（2）は作品から読み取られる事項や視覚障がい者の特徴、メディア（ラジオ）との関わりである。

1：Sent Of Woman～夢の香り～（1992年・アメリカ）

（1）

高校生のチャーリーが盲目の老人フランクの所へアルパイトのために訪れる。そのアルパイトの初日からチャーリーは無理やりニューヨークの旅に同行させられる。

かつての軍人の中佐であったかつての身分のプライドとは裏腹に、盲目になった自分の過去への恥や、家族との複雑な関係など人生へ悲観を感じているフランクが、チャーリーと出会い過ごしていく中で心が開かれ、生きる価値を見出していく。オリジナル版でイタリア映画がある。

(2)

- ・ラジオに関わるシーンは無いが音楽をかけるシーンがある。
- ・白状を使って行動している。
- ・視力を失ったのは軍人時代であり、戦争による後天的な視覚障がい者である。

2 : Dancer in the dark (2000年・デンマーク)

(1)

時代は1960年代。チェコ出身でシングルマザーの主人公セルマ。彼女は生まれつき遺伝性の病気で視力を失いつつあった。彼女の唯一の楽しみは劇団で稽古をうけ舞台上に立つこと、映画を見ることだった。

のちに一人息子も同じ症状になることが分かっていた。そのため息子の手術のために親子で渡米する。セルマは工場で働き、息子に内緒で手術費用を貯めるためだった。しかし視力の低下が急速に進み、ミスが増え仕事をクビになる。

そんな時、親切にしてくれていた近所の友人が破産し、セルマが貯めていたお金を盗む。それを取り返そうとしたセルマはもみ合いになり、友人を殺してしまう。

そして殺人犯として逮捕されたセルマは裁判にかけられ、死刑宣告を受ける。息子の手術が行なわれることだけを願い続け、セルマは絞首台で死ぬという結末を迎える。

(2)

- ・副音声の役割と、視覚障害者にとって映画などの公共の場におけるハンディーを感じる点があった。
映画館でセルマが友人と映画を見ていて見えづらいシーンで質問をし、それを聞いていた他の観客ともめるシーンである。
- ・死刑執行前のこと、セルマが「ラジオの音は聞こえる？」と警官に尋ねるシーンがある。
- ・目が見えていると嘘をついて働き続けるセルマから、視覚障害は疑似体験ができるが、実際に視覚障害というのは白杖や盲導犬がついていなければ分かりづらく理解されにくい。
- ・音や感覚、歩数などの数をヒントにしている。

3 : Ray (2004・アメリカ)

(1)

アメリカの南部育ちの黒人ジャズシンガーアメリカのレイ・チャールズ(1930~2004)。幼い頃に当時治療ができなかった緑内障になり視力を失う。またその頃からピアノを始め、盲学校へ通うようになる。

そして1940年代にバンドを組み、そこから彼の音楽生活が始まる。音楽の成功を収める一方で、幼い頃に弟を失ったトラウマや麻薬に苦しんでいた。のちにそれを克服し、音楽に対する熱い情熱を世界に広げていくレイ・チャールズの生涯を描いた作品。

(2)

・映画内でのメディアの関わりとしては、レイ・チャールズが幼い頃からラジオを聞いてきたことやラジオ番組へゲスト出演しているシーン、ラジオの放送シーン等ほとんどテレビよりもラジオがメディアとして登場していた。

・見えないことへの恐怖感や、見えないからこそ小さな音で聞き分ける等、視覚以外の感覚を駆使して情報を得ている視覚障がい者を描いている。

- ・「盲目、盲目」といった表現が多く盲目に対する差別の強さや、黒人差別をしている時代も描いている。

4 : 解夏 (2004・日本)

(1)

小学校教師をしていた主人公の男性が若くして、視力を徐々に失っていくパーチェット病になる。視力を失うことに恐れな

がらも周囲の人々に支えられ、最後には視力を失う時を迎える。2004年「愛し君へ」でドラマ化していた。

(2)

- ・主人公が視力を失うことへの恐怖や、障がい者になることで家族や恋人の負担になることへの悲しみや不安を描いている。
- ・テレビ・ラジオ等の関わりが見られる場面は無いが、音声設定では副音声（映像の状況や動き、人の表情などの説明する音声）にすることができる映画である。バリアフリー映画として増えている。

- ・視覚障害者を取り上げた作品でラジオに注目したが、特に1960年代アメリカを舞台にした映画では見られるだけで、その他の映画ではあまり出てくることはなかった。Rayのような有名人では発信者側としても出演している。

- ・視覚障害者も共に楽しめる副音声を利用したバリアフリー映画が、視覚障害者のメディアとの関わりを広げ、晴眼者と共に共存していける社会を生み出すのだろう。

10. ケア・コミュニケーション

メジャー・シェア・ケアのメディアコミュニケーション論（小玉 美意子著）の第1部・第3章のケア・コミュニケーションを参考に抜粋・省略し、メディアへのニーズ・利用の変化について述べていく。

まず「メジャー・コミュニケーション」はメジャーな考えを受け手に伝えるコミュニケーションである。次に「シェア・コミュニケーション」とは主流とは違う視点からオルタナティブな考えを共有するコミュニケーションである。最後に「ケア・コミュニケーション」とは情報の受け手の心を癒すコミュニケーションである。

現代のニュースでは日常生活の中の当たり前のことよりも大きな事件や災害・事故などの社会的影響力が高く、異常な出来事が一般的に多く報道されている。それを小玉は「警鐘のジャーナリズム」と述べている。そしてそれは社会において公共のために機能し、公正を求める特別な存在として人々に知識情報を伝達し、時代の要求に応じてきた。

しかし、その一方で今までのメディアは「癒し」や「つながり」「愛着」といった人々の心を響かせる内容のものがジャーナリズムに少なかったのではないかと小玉は批判している。なぜなら東日本大震災や同時多発テロといった出来事後、自分たちの心を癒すメディアが求められるようになったからである。しかし、発信したことが必ずしも当事者以外の人々に共感され癒しとなるとは限らず、時に悲しみにもなりうる。それでも違ったジャンルを伝えていくことはメディアの新しい可能性でもあり、新しい役割になるのではないだろうか。

また、1990年代では視聴者にとってメディアは「与えられる」存在であり、視聴者は「受け身」の存在であった。しかし、近年のSNSなどの身近なソーシャルメディアの普及により、視聴者は与えられるだけでなく、「与える発信者」側にもなりつつある。またそれに加え「参加者」にもなり、幅を広げている。そこから見えてくるコミュニケーションは、人々との関わり合いであり、時に「癒し」や「つながり」「愛着」へと繋げられる。

例えばマイノリティーとして障がい者は自分のメディアを持ちにくい立場にあった。そのため、障がい者家族や支援者とともに正しい知識の伝達のためのメディアを持つようになると、そこでは同じ体験・心情の共有が行われ、お互いに「癒し」と「励まし」を与える。マイノリティーにとって自分が困難な状況の中で生き抜く時に自分を大切にすることができる癒しのメディアであり、また自分自身を発信することも癒しなのではないか……。

これは社会福祉における、ピア・サポートといえるだろう。地域社会での関わりが薄くなっていく中、ケア・コミュニケーションはいつしかメディアを媒体に行われ、人々に安心・自分の主張をする場を与えている。マイノリティーの障がい者にとっては自分たちの情報をリアルに伝えることができるのがメディアなのだ。

次ではマイノリティーの障がい当事者たちの番組「バリバラ」の例を挙げていく。

11. 障がい当事者達が作る番組（NHK バリバラ）

現在、NHKで放送されている障がい者情報バラエティー「バリバラ」という番組がある。この番組は障害当事者、健常者のお笑い芸人が出演し、日常生活の様々なジャンルについてトークの形で話し合い、障がい者が本当に必要な情報を伝えていく番組である。番組の目的は、「いろいろな意見をぶつけ合い、バリアフリーの社会にしていこう」だ。

この番組では知的障害、身体障害、発達障害といった様々な障がいをもった人々が出演している。番組の特徴としては「当事者が社会に批判的な意見を訴える主張ばかりの番組」という暗くマイナスなイメージはなく、笑いあり障がい者の事を知れる印象を与えられる。

また、TV番組だけでなくホームページ上にも番組の情報や、視聴者（障がい当事者・または家族）が意見や体験談を語ることのできる参加型の番組である。また、出演者自身のブログも公開されている。

この番組に対し、障がいに興味を持つ一方で2チャンネルなどのサイトでは出演者に対する冷やかなコメントも存在している。

しかし暗いイメージ、社会の中で助けが無いと生きられないと思われてしまいがちな障がい者に対し、全く違うイメージを持たせ、障がいについて視聴者に考えさせるだろう。

なかなか民法のテレビでは扱われることのない障がい者自身が出演して意見を言い合うこの番組は、今までは特集やインタビューをされる側だった障がい者にとって社会に開けている。このことは当事者たちのケア・コミュニケーションの場の役割を果たすだけでなく、普段の生活では出会うことのない私たち健常者に障がいへの理解・思いをリアルに生の声で発信できる場の役割を果たしていると言えるだろう。

この他にもNHKで障がい者・福祉のための情報番組がある。

社会を生きる

- ・ハートネットTV（TV放送）
生きづらさを抱えた全ての人への番組
「つながり」がキーワード

障害者全般

- ・バリバラR（ラジオ放送）
バリバラでは語られない本音の番組

盲ろう者

- ・ろうを生きる難聴を生きる（TV放送）
ろう者、難聴者、中途失明者の方々が必要とする情報を提供する番組
- ・聞いて聞かせて～ブラインド・ロービジョン・ネット～（ラジオ放送）
視覚障害者に向けた情報番組

聴覚障害

- ・NHKみんなの手話（テレビ放送）
日常的な会話シーンから手話表現の特徴を分かりやすく紹介する番組
- ・NHK手話ニュース（テレビ放送）
今日のニュースを手話で伝える5分間番組
- ・NHK手話ニュース845（テレビ放送）
今日のニュースを手話で伝える15分番組
- ・週間手話ニュース（テレビ放送）
一週間の出来事を手話で伝える20分間の番組
- ・子ども手話ウィークリー（テレビ放送）
聴覚障害のある子どもたちを対象にした手話ニュース番組
- ・ワンポイント手話（テレビ放送）
初心者も分かりやすく学べる手話を紹介する番組

児童（発達障害・健康・学校支援・子育て支援）

- ・スマイル！（テレビ放送）
発達障害を抱える子どもの特別支援教育・学級活動のための番組
- ・コミトレ（テレビ放送）
コミュニケーションや社会参加についてのヒントを提供する特別支援教育番組
- ・ストレッチマンハイパー（テレビ放送）

- ストレッチマンによる子どもたちが体操や遊びに挑戦する番組
- ・すくすく子育て（テレビ放送）
- ・まいこちスクスク（テレビ放送）
- ・まいこちスクスクジュニア（テレビ放送）

高齢者

- ・ラク楽ワンポイント介護（テレビ放送）
- 介護のハウツー番組

その他

- ・福祉セミナー（ラジオ放送）

むすびに

視覚障がい者が情報の入手ができないことできないだけでなく、情報の少なさだけでなく、メディアが話題性を生んでいる現代では取り残されていくテレビが作る話題についていけない孤独感を味わう情報格差がある。

差別をなくす考え方として「自分がいつ障害者になるかわからないから」という見解ではなく、自分たちにも役に立っている部分があり、そのもの自体がどんなメリットを持っているのかなどを理解し、それに意識しながらお互いに受け入れていく必要がある。（10月発表時）

今回「ケア・コミュニケーション」についての参考文献を読んだ。また「バリバラ」の番組見ていくうちにその中で見られたのはメディアが人々に与える支えは SNS のようなネットワークだけでなく、テレビなどの大きなメディアを利用した新しい発信方法である。社会・健常者から排除されやすいのは障がい者だけでなく女性や子どもなど社会的弱者も含まれている。その人たちにとって支えとなるようにメディアをどのように活かしていくのかを検討していきたい。また NHK で放送されている番組をみながらそれぞれの番組の特徴をみていき、それらを通して視覚障がいについて改めて考えて生きたい。（12月提出分）

参考文献：

楠敏雄・三上洋・西尾元秀（2007）『知っていますか？視覚障害者とともに 一問一問』

松井進（2003）『見えない目で生きると言うこと』

鈴木健夫（2001）『白い杖、いきいきと街へ』

岩井和彦（2009）『視覚障害あるがままに Let it be～夢は情報/バリアフリー～』

障害者白書

小玉美意子（2012）『メジャー・シェア・ケアのメディアコミュニケーション論』

参考資料：

朝日新聞デジタル

NHK福祉番組一覧 (<http://www.nhk.or.jp/heart-net/program/>)